

猿投神社蔵正安本文選

小林芳規

愛知縣の古社 猿投神社に、鎌倉時代の寫 については、東京大学史料編纂所が作成し所

本で当代の訓点を有する文選三点がある。い 蔵する「參州猿投神社蔵書目 附與書」(昭

すれも、卷一で、うち二点は殆ど一卷全部が 和八年十二月十五日調とあり)に、識語・体

存している。二点の中の一は、「弘安伍年(裁等の紹介があるが、この正安四年本の方は

一三八二)十月廿六日書寫畢」「交了」の識、それに漏れたから、従来一般に知られる模合

語のあるもの(弘安本と呼ぶ)。他は正安四 かが殆どなかったものである。

年(一三〇四)の識語がある。後者がここに 文選三十卷の撰者・内容・注釈学等及びわ

紹介しようとするものである。(残る一点は が国への伝来と盛行のこと、並びに諸本につ

「序」の一部で、築島氏が本輯に紹介された) いては、すでに諸書に詳しいので省略する。

弘安本も同氏が調査されている。前者弘安本 特に諸本について、「文選索引」の「文選諸本

の研究」に詳細を極めているが、弘安本は無、天地約二十九、八センチ、上欄の空白が三、論他の二点にも觸れることがないから、猿投神 三センチ、下欄が三、四センチで、取間は社の文選は他の諸資料とともに論及の機を逸 三、三センチである。首尾揃わっているが、せられる状態にあつたと思われる。途中「西都賦」の中間「華燭餅」の次が約一

從來知られてゐる文選の古寫本で訓点を有 紙介と、同じ賦の「平原赤勇士」以下「並蹈する。天理図書館蔵五臣注文選卷才二十、九 潜穢窮虎」までの二行介を欠いている。又前半

糸本文選計二十一卷(卷二十一・二十二は無 には虫損等で文字の不明の箇所もある。当初訓)、大東急記念文庫蔵文選卷三と比べて、本書を手にした時は各紙が離れ順不同であつた。特に弘安本で欠けている巻首が本書でその位置づけについては、桑島氏が説かれる だが、他本により復原した結果、右の欠もあるが殆ど全巻を得られたのは幸いのことである。所最も古く、この正安本がそれに二十余年違 った。は完備しているのは喜ばしい。これによるとれるものである。

本書は、卷子本一軸で軸を逸する。斐紙様 この巻第一は、首に唐の李善の「上_レ文選註_ヲ表料紙に薄墨で罫を画し一行十四字を収める。しを冠し、次に撰者たる梁の武帝の長子、昭

明太子の自序となり、本文に入ることが介る。善注本と異系であることを本文の異同で精し

本文は、西都賦序・西都賦・東都賦に、明堂く論じているが、本書は如何と見るに、オ一

・壁雍・靈台・寶斲・白雉の詩及び西京賦で例の西京賦にある「鯨鯢失流」は九条本・上

全く注なく、欄外や行向の諸所に他本との校野本と同じく「鯢」に作ってあって唐寫本及

合・字句等の注解を付している。無注本（三）び推定の李善本と異なっている。但し、下欄

十卷）に李善の「上文選註表」を冠するのは「魚、或本」とあって、唐寫本系の方も校

不審の点であるが、斯波六郎氏が「わが国の合に見ていることが介る」

或る時代に於て、古来の伝寫本に、李善の表、本書は全卷に朱のヲト点と墨の傍訓等が

を加添することが行はれ、爾後それを加添せ、豊富に加えられている。朱はヲト点の外に

るままに更に伝寫したものが、上野本や九条、異本との校合、濁点の付加等にも用い、特に

本となったのであろう」（『文選索引』付録、墨の訓の上を朱でアクセントを付した所もあ

九条本文選解説）と推定されたが、本書もま、るから、順序としては朱が墨の後であること

た正にその通りになっているのは興味深い、が介る。卷末に、右の朱筆で

とである。（因みに、右の解説で九条本が李、正安第四、七、上句、一校了、

とある。墨訓は朱点と重複する所もあるが、大体相補って読みうる上に、仮名字体や返点から見て、同時のものと見られる。但しサ々俊筆がある。本文は達筆で、同じ頃の書寫と見られる。ヲトト点は俊揚の如くであるが、博士家点のうち紀依点の特徴を持っている。訓点史上から見るに同じ博士家でも、清原家などの訓法とは又異なったものである。ことが介る。例えば「則」字は清原家では上の字に「トキンバ」と訓んで、この字は不読とするのが特色であるが、本書では「則チ」とも訓んでいる。又大江家の訓を引いて、

郊ノ野之區カウヤノノ・号コウ爲タカシ近チカシ一イツ蜀シヤク (声点略)

166 江ナウコロ
172 江ナウコテ

とある等、博士家訓法を知る上に大切な資料である。又本書にはその名の如く、極めて多量の文選訓みの例を見るが、これを『圖書寮本類聚名義抄』所引の文選の訓と比較すると殆ど一致する。例えは

公コウ 汎フン灑サイ トソノイテ選 (圖書寮本、声点略)

↑ ↓ 汎フン灑サイ (正安本文選、東都賦)

蹂躪 トファミニシテ選 (圖書寮本、声点略)

↑ ↓ 蹂シラ躪リントファミニシテ (正安本、西都賦)

巖峻 イハホ選 (圖書寮本、声点略)

↑ ↓ 巖カンシラ峻イハホ (正安本、西都賦)

周流 トメクル選 (圖書寮本、声点略) ↑ ↓ 周シラ流リウ

メクラ

珠勝 (正安本) 類文村
高野山白文

(正安本 西都賦)

の如くて、これは 凶書寮本の引用が原典に

忠実であったとされた築島氏の好論 (「訓点

史上の凶書寮本類聚名義抄」 国語学 37 輯) を

裏付けるものである。

傍訓は又 鎌倉時代語の語彙・音韻の考察

に有益であろう。音韻に關する二三を挙げる。

1. オ列とウ列との通う例として、「凡ス」(

オホヨソ)(序文の終り)「弱エハシ(ヨハ)書が果す役割の大なることは前にナマ述べた。

シ)」などがある。「おほよす」は梁塵 右のような見地から、ここには原本にでき

よす おほよそ同音なり」とある。(福 ただいた、私意は能うかぎり加えないことに

島邦道氏「かぞふ」と「かすふ」 国語国 した、原本の朱と墨との區別は次のようであ

文、昭和三十五、三月、参照)

2 「興」「龍」「陵」などを「一エウ」と書い
た例がある。 興々(習小往來)

四日興 丘陵 陵墓 時龍 雲龍

(昇龍、興、衰などの例もある)

3 その他他撥音表記が多く「豈」「自」な

どあり、又「陰陽」など連声の例もある。

以上気付いた一二であるが、その他、訓以

外でも、諸本との關係を考える上にもまた本

コ

ヒンチネトを

新ニ守

見字本皇社(秘抄にも見える。又古今集註にも「おほ

るだけ近い姿で模寫した全文を掲載させてい

る。

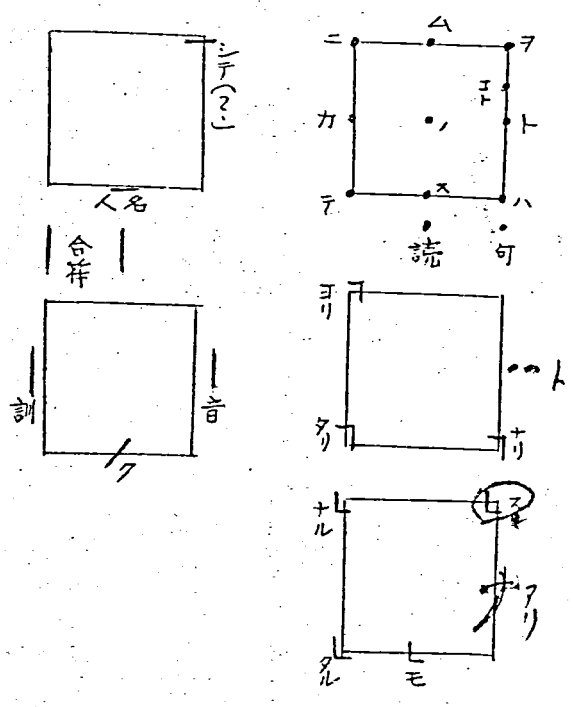
墨川本文、墨訓、四声点、(六声を区別する)

合点、返点、校合、注等の書入れ

朱リ次の表に含まれるヲト点の類

右に違反する表記については脚注や本

文中にその旨を明示した。



本資料は 今夏七月、築島裕氏と猿投神社
を訪うて同社所蔵の漢籍・仏書類の調査に当
つて拝見することを得たもので、調査に関し
て同社宮司、白鳳秀夫氏から多大の芳情を賜わ
つた。こゝに厚くお礼申し上げる。また、教
示を賜わった築島氏に謝し奉る。

(昭和三五年 初秋)

〔什記〕

本資料は量が多いので今載させていたたく予定
である。今回の表と序との全部で全体の
七分の一に当る。

1 上文選註表

ル(美) (二朱)

2 臣善言竊以道光九野縹緲以照

*合符はこの行うは墨、以下5行まで同じ。

3 臨德載八埏麗山川

4 文斯著含章之義聿宣叶人靈以取

5 則基化成而自遠故義繩之前飛葛義

6 之浩曷為黃之後揆其靈之奧詞

*印合符は、は墨、下は朱、云イ

*右の三字は欄外なり。

7 步驟分途星躔殊建鉢鍾愈暢舞詠

*右倍音字訓三字横消、印合符は墨、不明

8 方シ 纘シ 楚國フ 詞人シム 御蘭芬ヨク 於ウ 絕代シエ 漢朝ク

以下この頁の印の合符は甲空

9 才子サイ 綜ハ 輦ス 悅シ 於セ 遥年イ 虛玄ウ 流シ 正始シ 之シ

10 音氣シ 質シ 馳シ 建安シ 之シ 體シ 長離シ 北シ 上シ 騰雅シ

***イ合符七

11 詠フ 於ケ 土シ 陰シ 化シ 龍シ 東シ 鷲シ 煽シ 風シ 流シ 於シ 江左シ

***「〇」は濁音表示、以下同。

12 爰シ 逮シ 有シ 材シ 弥シ 幼シ 昭明シ 太子シ 業シ 膺シ

***左傍の「ケフ」後筆

13 守シ 器シ 譽シ 貞シ 問シ 履シ 居シ 肅シ 成シ 而シ 講シ 藝シ 聞シ 博シ

14 望シ 以シ 招シ 賢シ 塞シ 中シ 葉シ 之シ 詞林シ 酌シ 前シ 修シ 之シ

15 筆海周列綿躋品盈尺之珎楚望長

大朝及々

※ケウの右に
「大朝及々」とあり
紙の縫目と半分隠
れたり。

16 瀾援徑寸之寶故撰斯一集名曰文

經イ

17 選後進咸資准的伏惟陛下經

※印合符は臺

18 緯成德文思垂颯則火居尊曜三辰

耀イ

19 之珠璧希聲應物宣六代之雲英孰

20 導可撤壤崇山道消宗海臣蓬衡藪品

21 樵散陋姿汾河委選夙非成誦嵩山

17 (三ノノノ)

22

蘭フタハ未カスス義トラ登トラ心ヲ握トリ玩ミテ斯ヲ父ヲ載シテ移シテ涼シク燠ク

*印の合字は墨。

23

有ヨリ欣ム永シ旧シ寶ト味シ通シ津シ故シ勉ム十シ舍シ之シ勞シ

24

寄ツ三ツ餘ツ之ツ暇ツ弋ツ釣ツ書ツ部ツ願ツ言ツ註ツ緝ツ合ツ

25

成シ六シ十シ卷シ殺シ青シ甫シ就シ輕シ用シ上シ聞シ亭シ帚シ帚シ幕シ

26

自シ珍シ緘シ石シ知シ認シ敢シ有シ塵シ於シ廣シ内シ庶シ無シ

27

於シ小シ說シ謹シ詣シ闕シ奉シ進シ伏シ願シ鴻シ慈シ曲シ

28

垂シ照シ覽シ謹シ言シ

ハツキ
シ
シ

*「カス」後筆

29 顯慶三年九月十七日文林郎守ヲウシユ

30 太子右内率府録事參軍事崇賢シムケン

31 館直學士カクナカシ・臣李善上表注セア

32 文選序モンゼン

33 蕭元始シウゲンシ・玄風ケンフ冬トウ究クウ夏カ巢ス之時ノトキ

34 茹毛飲血之世ニシ以質民淳斯文未作アツクテ

35 遠乎伏羲氏之王天下始畫八卦造トヨクニ

* 梁昭明太子撰リョウシヤウメイ

※この漢字六字
と「ア」とは「朱」

*印「」は墨

36 書ケテ契カケテ以カケテ代カケテ結ムスビ繩ヒト之ノ政ツキ由ヨリ是ニ文ニ藉セ生セリ焉ナリ

37 觀ミ乎ニ天文ヲ以テ今ノ時ニ變ヒ觀ミ乎ニ人文ヲ

38 成ル天ノ下ニ之ノ時ニ義ヲ遠ク夫レ若ク夫レ

39 推ツイ輪リン為シ大ノ輅ヲ之ノ始ニ大ノ輅ニ寧ニ有リ推ツイ輪リン之ノ

40 質カサナル增ヒク水ヲ為シ積ム水ヲ所レ成ル積ム水ヲ曾カサテ後ニ增ヒク水ヲ

41 之ノ稟サトコトヲ何カ益ヲ踵ツキテ其ノ事ヲ而シテ增ヒク華ヲ變ヒ其ノ本ヲ

42 厲カケリ物ヲ既ニ有リ之ノ冬ニ亦シテ宜シ然ル隨フ時ニ變ヒ

ケテ

*** 合符トシテ

43

入詳^ニ心^ヲ序^ニ試論^ス之^ヲ曰^ク詩序^ニ曰^ク詩

*「ハ」ロカニナリ。

44

有^ル古^ク義^ヲ焉^一曰^ク風^ニ二曰^ク賦^ニ三曰^ク比^ニ四

*「ハ」去声古行末。
俗の「頌」の音同。
*「ハ」古音「ハ」本ナリ。

45

曰^ク興^ニ五曰^ク雅^ニ六曰^ク頌^ニ至^ル於^テ今^ノ之^ノ作^ル者

*「ハ」上声古は末、去声
点ナリ、此は是。

46

乎^ニ異^ル乎^ニ古^ク昔^ク古^ク詩^ノ之^ノ體^ニ今^ノ則^チ余^ノ取^ル賦^ノ名^ヲ

大印の合符は是、48
47と同し。

47

表^ス之^ヲ於^テ前^ニ讀^ム焉^一繫^ス之^ヲ於^テ末^ニ自^ラ茲

48

流^ル寔^ニ邑^ニ居^ル則^チ有^ル渠^ニ虚^ニ無^ク止^ム

分シ
此カニハ「爾」後補

49

是^レ之^ヲ作^ル誠^ニ佃^ニ遊^ル則^チ有^ル長^ク揚^ク羽^ニ獵^ス之^ヲ制^ス衣^ヲ

21 (三ノノ〇五)

50 若其紀一^{シテ}事^シ詠^フ一^ヲ物^ヲ風^ノ雲^ノ首^ノ木^ノ之^ノ興^ス

平声輕
不入声輕

51 虫^イ復^キ禽^ノ獸^ノ之^ノ流^ヲ推^シ而^{シテ}廣^ク之^ヲ不^レ可^ク勝^ル載^ス

上聲「虫」イハス

52 楚^ノ人^ノ屈^ル原^ノ含^ム忠^ヲ履^ス潔^ク君^ノ匪^レ從^ズ流^ル

「イサキヨキカヨ」は「カ」に見えうが、「事」ナリ

53 耳^ニ平^ク思^ヒ遠^ク慮^シ遂^ニ放^ス湘^ノ南^ノ耿^ク介^ス

54 之^ノ意^ヲ既^チ傷^ム壹^ニ鬱^ク之^ノ懷^ヲ靡^ク想^フ臨^ミ淵^ニ有^リ懷^ク

55 沙^ノ之^ノ志^ヲ吟^ミ澤^ニ有^リ惟^ク悴^ク之^ノ容^ヲ騷^ク人^ノ之^ノ文^ヲ

56 自^レ而^{シテ}作^ル詩^ヲ皆^ク蓋^シ心^ヲ一^ニ下^ルカ^クテ
見^スル^ヲ「カ」フンテト

57

而形於言アラハシ。開ヒ。雖レ麟趾ヒ。心始之道ミチ。

*印の合符は堂

58

三國之音表アラハシ。故風雅之

59

炎漢之中葉ユリ。厥途漸チヤク

60

異フ。退リ。傅フ。有リ。在リ。郢ノ。之ノ。作ル。降リ。將シ。著シ。河ノ。梁ノ。之ノ

***この入声輕点は
出ない。
「將」の去声点も朱
***「中」の「著」イ朱。

61

篇ヒ。四ノ。言ノ。五ノ。言ノ。區ニ。以テ。別ル。矣。又。少。則。二。字。三。イ

62

具チ。九ノ。言ノ。各ノ。體ニ。牙ノ。分ル。驥ヲ。並ニ。驅ル。頌ル。者ノ。所ニ

***「音」は朱。

63

沐ノ。樓ノ。下ニ。不レ。讚ル。成ル。功ノ。吉ノ。甫ノ。有リ。穆ノ。若ク

23 (三ノノ07)

64 之談^イ季子^キ有^ハ至^テ矣^イ之歎^ス舒布^ス為^シ詩^ハ既^ハ

*平声点、朱ナリ

65 其^シ如^シ彼^ハ物^ハ慙^ハ成^シ為^シ頌^ハ又^ハ亦^ハ若^シ此^ハ次^ハ則^シ箴^ハ

総イ

*「総イ」は朱。

66 興^シ於^リ補^ク闕^ク或^ハ出^ル於^リ弼^ニ進^ス論^ハ則^シ折^リ理^ハ精^ク

*「ヨハノフ」の「ノ」の上を後筆にて「又」と改む。

67 銘^ハ則^シ序^ハ事^ハ清^ク潤^ク美^ク終^ハ則^シ誅^ハ發^ス圖^ハ像^ハ

*里字の音点の外に朱の「と」濁音点あり。

68 具^ハ讀^ム朋^ハ教^ハ令^ハ之^ハ流^ハ表^ハ奏^ハ箴^ハ記^ハ

69 悲^シ之^ハ別^ニ書^ハ誓^ハ符^ハ檄^ハ之^ハ品^ハ予^ハ祭^ハ哀^ハ之^ハ作^ハ卷^ハ景^ハ

（相外「景」は朱）

70 客^ハ指^シ事^ハ之^ハ制^ハ衣^ハ三^ハ言^ハ八^ハ字^ハ之^ハ文^ハ篇^ハ辭^ハ引^ハ

*「容イ」は朱。



71 序碑碣誌狀衆制表鋒起源流間出壁言

*「碣」の入声点、および「狀」の去声点は本。

72 陶範異品並為八耳之娛黼黻不同

*「黼」の上声点、は未、ヨト点に、如く見える。
*「黻」の四声は未。

73 伊為從 飢作者之致蓋云備矣

74 余監撫餘閑居多暇日庶觀文園以迄

*「以」の合符が墨、左の「以」

75 覽辭林未嘗不心遊目想移晷忘倦

*「未」の右角の「」は墨のヨト点。

76 自娘漢以來眇焉攸心遊時更七代數

77 逾子祀 辭人才子則名溢於縹緲飛

*「縹」の平声点と上声点とあり。

78

文マ為ス本ホ今イマ之ノ所トコロ撰ヒキ又マタ亦モ略リヤク諸シヨ若シ賢ケン人ヒト

火ヒ於ニ後ノチ爰ココ

79

穢ケガレ集ツク其ノ清スガ英ヒコ而シテ欲ム兼ニ功コト太トウ半ハ難ガシ矣ナリ若シ

80

夫ソノ姫ヒメ少シ公キミ之ノ籍セキ孔コウ父フ之ノ書シヤ与ト月ツキ月ツキ復タビ懇ケン

81

鬼キ神シ羊ヤウ奠テン寔シツ定テイ孝コウ敬ケイ之ノ准ジュン式シキ人ヒト倫リン之ノ師シ

82

豈アヒ可カ重チウ以テ受ウケ其ノ義ギ加カ之ノ前マヘ截セツ孝コウ莊シウ之ノ

83

作サツ管カン加カ蓋ガイ以テ立タツ意イ為ス宗ソウ亦モ以テ能ス

84

文モン為セ本ホン今イマ之ノ所トコロ撰ヒキ又マタ亦モ略リヤク諸シヨ若シ賢ケン人ヒト

26 (三ノノ)

「染」は「庶」の「シ」は濁り符で「シ」は「シ」。

「決」は「癸」及「秋」の「シ」は「シ」。

「方」の合符が「上」中のは「朱」。

「入」は「朱」の「シ」は「シ」。

「ア」は「ニ」。

「上」は「石」は「朱」。

「入」は「石」は「朱」。

「時」は「二」は「朱」。

「夫」は「朱」。

85 之美^ノ辭^ヒ忠^シ臣^ナ之^ヲ抗^カ直^カ謀^ヲ夫^ノ之^ヲ美^ク話^ス辨^ズ善^イ

カハ決可浪及ホウフ
ヨキ點本世胡適又公
モククリ返

善イ
（由の）
*印、合符は墨云。

86 志^{（墨）}之^{（タリ）}舌^{（シ）}端^{（シ）}冰^{（シ）}釋^{（シ）}泉^{（シ）}涌^{（シ）}金^{（シ）}相^{（シ）}王^{（シ）}振^{（シ）}所^{（シ）}謂^{（シ）}

ト下
イニカクニ
カ多テ如
イニル

*「抗」「謀」とも濁
音符は墨字の単点
「リ」の上に朱にて
「ニ」を加えたもの。
*「ク」「イ」二字朱。

87 議^{（シ）}稷^{（シ）}下^{（シ）}仲^{（シ）}連^{（シ）}之^{（シ）}却^{（シ）}秦^{（シ）}軍^{（シ）}食^{（シ）}其^{（シ）}

ト下
カハ
カニリンノ
イニテ音異又

88 之^{（シ）}下^{（シ）}座^{（シ）}留^{（シ）}侯^{（シ）}之^{（シ）}發^{（シ）}八^{（シ）}難^{（シ）}曲^{（シ）}送^{（シ）}之^{（シ）}吐^{（シ）}

ト下
カハ
カニリンノ
イニテ音異又

（墨字）
*「ユル」
とあり。

89 亦^{（シ）}奇^{（シ）}盖^{（シ）}乃^{（シ）}事^{（シ）}義^{（シ）}一^{（シ）}時^{（シ）}語^{（シ）}流^{（シ）}子^{（シ）}載^{（シ）}概^{（シ）}見^{（シ）}

ト下
カハ
カニリンノ
イニテ音異又

90 墳^{（シ）}藉^{（シ）}傍^{（シ）}出^{（シ）}子^{（シ）}史^{（シ）}若^{（シ）}斯^{（シ）}之^{（シ）}流^{（シ）}又^{（シ）}亦^{（シ）}敏^{（シ）}示^{（シ）}博^{（シ）}

ト下
カハ
カニリンノ
イニテ音異又

*「出」の「フ」は
「出」の「フ」は
「出」の「フ」は

91 傳^{（シ）}之^{（シ）}簡^{（シ）}續^{（シ）}而^{（シ）}事^{（シ）}與^{（シ）}篇^{（シ）}章^{（シ）}今^{（シ）}之^{（シ）}所^{（シ）}集^{（シ）}

ト下
カハ
カニリンノ
イニテ音異又

*「與」の「フ」は
「與」の「フ」は
「與」の「フ」は

又^ト至^イ於^ハ記事^ニ之^{コト}史^ニ繫^ル并^ニ之^ト書^ニ

蓋^ニ所以^ニ其^{コト}是^レ非^ニ紀^ト別^ト同^ト異^ト方^ニ之^{コト}篇^ト記^ト

布檢^ニ交^ニ

翰^ニ亦^ニ已^ニ不^レ同^ト若^シ其^{コト}讚^ム論^ト之^{コト}綜^ム綱^ト粹^ト采^ト

序^ト述^ト之^{コト}錯^ト比^ト文^ト華^ト事^ト出^ル於^テ沈^ム思^ム義^ト歸^ル

余^ニ故^ト与^ト夫^ノ篇^ト什^ト雜^ト而^シ集^ム之^{コト}遠^ト自^ト

乎^ト代^ト都^ト為^ル冊^ト卷^ト名^ト之^{コト}文^ト選^ト

云^フ介^ト

*中^ニ合^フ符^ハ墨^ニ

此^ノ字^ハ誤^リ也^ト

凡^凡次^比文^比之^ラ體^ラ各^ラ以^ラ彙^ラ聚^ラ詩^ラ賦^ラ既^ラ不^ラ曲^ラ體^ラ

一^一以^一類^一分^一類^一分^一之^一中^一略^一以^一時^一代^一

東多^東文^文庫^庫十^十餘^餘系^系地^地獨^獨雅^雅供^供養^養故^故永^永久^久三^三年^年
謂^謂凡^凡作^作法^法

松平復成



班孟堅^班兩都賦^孟二首^堅并序

張平子^張西京賦^平一首^子

班孟堅

印は堂。

「オホス」又
「オホヨス」
梁塵秘抄には
「オホヨス」とあり。

「曲體」は
欄外。朱なり。

以下「文選」
の本文。

(余白の都合で四
行だけ書く)

「イ元」は
朱。

以下
「兩都賦序」の
本文と続く。
(朱、元)